

# 山と博物館

第25巻 第12号

1980年12月25日

大町山岳博物館



正月のどんど焼(常盤上一)

撮影 丸山 隆士

## 大北地方の正月行事

お正月と言うことばのひびき、「早くこいこいお正月」と歌いつつ待った頃を思い出します。年中行事の中で一番大切なものとして、年神様を祀り、新しい年の安泰を祈る行事である。農家はこの一年の豊作を祈り、商家は商売の繁盛を、とそれぞれの仕事のことを中心に、祈る機会として、年神様を各家の神棚に迎えます。迎えた年神にはそれぞれの家として期待と敬愛の念とともに、いろいろとお供えし、もてなそうとするところに、正月の行事がいくつか生まれたものです。私たちの祖先がどのようなことをねがひ、何をしていたかを知り得る重要な手がかりでもあります。正月の行事として大北地方にはどんなものがあるのか、ということを描画的にまとめたものとして(今から五十年近く昔、昭和初めの頃)「北安曇郡郷土誌稿 三輯 年中行事編」にいくつかがついています。今とくらべて、より原形に近いと思います。なんとといっても正月らしい気分になるのは、家毎に飾る、門松であろう。この時ばかりは持主がどのものであるか、年神様のための松ということで、山から切ることが許された。

正月も数日過ぎて、一月の七日には外飾を、とそれぞれ日はまちまちになつてしまつたが、この門松を集め、別に用意した真木を中心に焼く行事、大町では「どんど焼」とか「三九郎」などと呼ぶ、子どもを中心にした楽しい行事がある。夕方暗くなつてくる頃、あちらの道祖神の前、こちらの広場で、と火が赤々ともえて、そのまわりを子ども達の「唱え歌」がはじまる。

三九郎やーい 三九郎やーい かかあの△  
△なつちようだ まわりまわりに毛が生えて  
と、くりかえしくりかえし火を中心に回り  
神札や書初めの紙がもえて天にまい上がる頃  
三九郎のクライマックスとなる。今にも子どもたちの声が聞こえてくるような、郷愁に  
かられる。

(社小学校教諭 白井潤)

# 白馬地方の正月行事(覚え書き)

若年のこと

稲の花・鬼除け・鳥追い・粥の箸

田中欣一

いささか懐旧の情をこめて書きます。こう性急に世の中が変っていくと、備忘のことがどれほど大事なことが知れません。

いつの時代でも、今の世を住みよくし、新時代に備えて物事をつくりかえていくのが、世のならいでありますから、年中行事が変わったり消滅しても別に驚くほどのことではありません。ところが近年、期せずして忘れかけていた昔の年中行事を懐しみ出し、あちこちで復活の動きが見られるようになりました。

事実、三九郎(白馬地方では「おんべんまき」といいます。略して「おんべ」です。)や、虫送り・鳥追い・松飾りなどが各地で行われるようになりました。

小中学校や高校での郷土研究や、一人一研究のようなものの中には、必ずといっていいほど年中行事の問題をとり出して、その対象

とするようにもなりました。そして、その数は年々増えている傾向であります。また、研究のまとめという段階で、小学生たちの言葉

を借りて言えば「昔の人は面白いことをやっていたと思う。」「どうしてこんな面白い遊びや行事がなくなってしまったのだろう。」「ぼくたちもこんなことをやって見たいなあ。」という具合であるが、表現の差はまちまちであつても、共通のことであるように思います。

土俗的な信仰を背景としたり、先祖や産土神を祀る風習の強い中で、昔は「昔といつても三十年ほど前のことですが」よくもまあ、こんなに丁寧に礼を尽して、いろいろとやってきたものだと思います。

正月行事だけを考えると、とてもここで述べきれぬものではないと思います。そんなわけですから、ここでは「若年」を中心にして、二、三のことを記しておきたいと思ひます。

S53.1.7白馬村幸田



松飾り ここでは柳を用いている

正月の十四日は「若年の日」といって、大晦日と同じような意味を持っており、「稲の花」を飾り、「鬼除け」をし、そして「鳥追い」をする日であります。田舎では元旦よりも正月十五日の

小正月のものが、大事でもあり親しみがあったようです。

現在では、稲の花の行事を続けている家は稀で、村中であの家の家とこの家と

いうくらいだろうと思ひます。「○○○じゃ、まだ稲の花やつてい

つぞ。よくやるじゃねえか。お

らも来年はやつてみるか。」といった話題も時々耳にします。

「稲の花」はミズブサという若木に飾りつけます。ミズブサは男が山へ(山といふのは林というほどの意味ですが、白馬村では、薪集めや茅刈りは無論のこと、田畑へ行くようなどきでも、山へ行くと言います。)行って伐つて来ます。伐つてくるといふより迎えてくるのです。「松迎え」などというのと同じです。

「鬼除け」に使う胡桃や栗の木もこのときに迎えて来ます。ミズブサも胡桃も迎えてくるには、年が明けて初めて刃物を使うので、山へ行って木(神様)を伐るときには作法がありました。

それは、半紙に包んだ餅を麻の紐で傍の樹の小枝に結び、米と塩を根元に供え、明(あき)の方(かた)へ向いて今年も無事であることを祈るのです。明の方というのは、その



稲の花(マユ玉) S36年白馬村

年の恵方(えほう)歳徳神のおいでになる方角であります。恵方は年によつて違います。曆を見ると、その方角は一切の凶殺を避け、幸福を司る大吉方なりとあります。

ミズブサというのは、赤味を帯びたつやつとした肌の木ですが、白馬地方では「赤ボヤ」といいます。火伏せの木ともされ、囲炉裏の自在鍵(鍵つけ様)を吊す横木に必ず使われておりました。山へ迎えに行くときは、この赤いつややかな肌が一番の目安でありました。勿論、秋までに一応の見当はつけて、そこへ行くのです。

稲の花は、十四日の晩についた餅を賽の目のように四角に切つて、ミズブサの小枝に挿すのですが、枝はしなやかで簡単に折れるようなことがなく、四方に広がる枝に挿して立てると、なかなか美しいものであります。枝に挿すのは、賽の目に切つた稲を表わすものだけでなく、藪玉もありましたし、茄子や

大根などの野菜や馬を型どったものも飾りつけることがあります。尤も藪や野菜は餅というわけにはいかないの、米の粉が主でありました。

十六日の晩には、阿弥陀様にお供えするために別に作っておいたものを、五枝くらい持ってお参りに出かけました。阿弥陀様は部落の小さなお堂でありましたから、近在の人たちも集って、狭い境内はごった返す程の人波でした。冬の寒い時季ですから、みんなスツベンジヨ(藪ぐつ)に、頭からケツトをかぶるといふ、出立ちでした。

お堂の入り口は、香煙でむせかえるほどでしたが、人が多勢でそこまですぐには容易ではありませんでした。堂内からは坊さんの読経の音が、いつまでも聞こえておりました。稲の花は十八日の朝には片付けてしまうのですが、それは、小枝の一つ一つを折りとるのです。固くなった稲の花を焼いて食べるのは、香ばしくて大そうおいしいものでした。囲炉裏にワタシを置いて焼くのですが、子供のいない家はそれがいつまでも貯蔵されていて、三月頃になってお土産に貰うことがありました。子供のいる家は、おやつがわりで忽ちなくなってしまうのが普通でした。

男たちは鬼除けにする「十二月」を作りました。胡桃や栗の木を縦七、八寸位の薄板に割って、間年には「十二月」と書き、普通の年は「十二月」と書きました。そして、普通のタテ板を家の戸間口や庇、土蔵や味噌部屋の入り口に挿したのです。それは鬼の侵入を防ぐというところからでありました。

十二月とか十三月とか書いておくと、何故鬼が入ってこられなかったのか、よく分りませんが、年寄りの話によりますと、門口にやってきましたが、「一年は十二月であるのに、十三月とは、さて、不思議なことだ」と、思案しているうちに夜が明けてしまうからだといふことでありました。

十四日の夕刻になるといよいよ「鳥追い」が始まります。鳥追いは男の子たちがとりわけ楽しみにしていたものです。隣近所の者同志が三三五五集って、家や土蔵の周囲を棒で叩いて歩きました。

昔は家や土蔵のまわりは、みんな藪や茅で囲ったものです。囲いは暖房にもなりますし、壁を雪から守るという意味もありました。雀たちはその茅や藪の中で眠っています。農作物を食い荒す外敵を、子供たちは棒で叩き出して追っ払うというわけです。北村の子供たちも南村の子供たちも道下も道上也、雪の中を一隊になって、声を喧して囃やすのでした。囃し言葉は、白馬小谷地方は無論、糸魚川市の大所迄までほぼ共通ですが、ここでは白馬村の青鬼部落に残るものを記しておきましょう。

デーロンドンの鳥追いはだ

- 西から東 たつ鳥は
- 雄どりめんどり かあしやつぱ
- 羽が十六 目が一つ
- 俺らのながしろ(苗代)隅々に
- うつつい鳥や三つ
- むっさい鳥や三つ
- 追つても立たぬ
- 叩いても立たぬ
- 尻切つて 頭切つて
- サンダーラへふんごんで
- 佐渡の鳥へ ホーイホーイ

佐渡の人たちはたまつたものではありませんが、白馬小谷地方では害鳥・害虫の類は、みんな佐渡ヶ島へ、罪人なみに追い払ったものでありました。部落外れまで追い立てた鳥追いの一隊は、最後に三声、四声「佐渡の島へ ホーイホーイ」を大合唱して家路についたのです。子供たちの囃の聲は、雪の夜空に高く響いて、まことに美しい一編の抒情詩だったことでありましょう。

一夜明けて十五日、この朝は一家の主人が先に起きて粥を炊きます。小豆と餅を入れ、きのう「十二月」を作るときに出た木屑を集めて炊きます。粥が炊きあがってから、母親が起きてくるのです。お粥は、物作り(写真参照)釜神様、稲の花へ粥の箸(ケエノハシ)を添えて供えられます。

粥の箸は胡桃の木でこしらえた長くて太い箸で、家族はみんなこの箸でお粥を食べました。またこの日は、炉の中へ足を下してはいけないことになっておりました。炉を田と見ただて、田の中へ鳥が入り、荒すのを忌み嫌ったということからだと言われます。



ブリのしっ尾。マキワラに挿してある 昭和初期 白馬村

お粥は半分残しておきました。十八日にも食べるからです。そして、十八日に更に残しておいた粥を、成り樹木に供えました。歳時記にも「成り木賣め」という季語が見られます。下伊那では今でも家の周りの柿の木に、その傷口につけ、供えているといふことでありますが、白馬では責めるといふ程木を傷めることはいらないようです。



物作り S36年白馬村

ものみな全てに神は宿っております。赤ボヤも胡桃も簡単ではあつても、神事を行なつて迎えてきました。小豆粥もただの粥ではありません。十五日に炊かれたものが、十八日まで神々との関係で繫がっているのです。信ずることなきところに行はなりません。さすれば、信仰や魂を信じない人々が、行事をしたとしても永く続くわけではないものと思えます。しかし、合理性や便宜主義だけで暮らせる程、人間は冷徹でもなさそうです。

「白馬小谷研究」主宰 55・12・3



# どんど焼きの思い出

## 大の方 健

編集子から乞われるままに、どんど焼きについて記してみることにしました。

「どんど焼き」の語源は、御幣(ごへい)の古称、とんどからようですが、この地方では濁音がつき、とんど焼きと慣習化しています。御幣ととんどは本来小正月のとんど焼きの時、心柱を中心に竹や紙で飾りたてたものや、鳥追いのとき手にもって踊る竹の棒を指すようです。これが慣用化して民俗となり、子供たちの正月の年中行事として定着していたのが、私たちの経験したとんど焼きだったので。

私の住んでいた所は、旧町の地先に発達した小部落でしたために、隣のとんど焼きに仲間入りできることが何よりの希望でした。しかし、他所者扱いされ、歓迎してくれませんでした。小学生など全部を集めても十人そこそこの町では、あの十五メートルもある心棒(柱)や屋根の丸太や杭用の棒を集める力に自信がありません。独自の企画と実施は不可能な



技でした。とんど焼きに仲間入りできない悲しきは耐えがたく、仲間入りしても疎んじられるのが普通でした。

ある年、親方格の上級生が「来年はとんど焼きをやるぞ」と決意を表明。「よっしゃやろ」とびびっていたのが私たちでした。

ところが、とんど焼きの段取りは大変です。まず前述の心棒(柱)の確保と運搬です。

十二月も終わりにになると雪は多く、その雪を踏み分けての心棒の運搬には、戸惑いとためらいをもつのでした。というものは所有主のはつきりしている松林から無断で大木を伐採してくるのですから。当然、踏みならされた雪道を通過する訳にはゆかず、人目をさけて雪中を引いてくる寸法です。

親方の指示どおりの場所に集合後、親方の指示する松の材を、ノコギリやナタを使って切り倒します。小さな材は束ね、大きな材には手ごろな引綱をつけ、早速、松林からの失敬です。人目の届かない時間と場所を選んで



の雪中運搬は幼い子供たちの長ぐつの中に容赦なく冷たい雪ごうりが入り込むのです。大げさな表現ですが、スリルとドキュメントがあり、ドラマのある材料集めなのでした。

とんど焼きを行う前々日あたりからは、いよいよ小屋作りが始まります。正月休みの最中で、いまのようにスキー大会もスケート大会もなく、レジャーとしてのそれも普及していない時代。小屋作りには、すべての少年たちがそこに集合する。知と技をめぐらしての建設作業が展開される。心柱を埋め込む地面

りついた地面掘りは大変でした。田に山と積まれた稲藁を使って縄をなう子供、雪を片付け、穴を掘り、小屋の骨組を按配する子供たち。まる一日から一日半かかって小屋は完成する。南側に小さな入口をつけ、周囲は藁で囲い、風雪を完全に遮断します。

奥まった所に地炉が作られ焚火の始まるころから子供たちの楽しいとんど焼き行事は、佳境への序章を告げるのでした。わずかなモチと味噌が持ち寄られ、火勢で真黒になったモチこそ神果あり、と教えられながらほうばるのです。

そして翌朝、自分のソリを押ししたり、引いたりして各家の門松を集めます。門松収集用

具はソリ。いまの自転車のように一人一人の子供が、親か自分の手づくりのものを持っていました。集まった門松で小屋の屋根を葺くとき、とんど焼きの小屋は完成です。

注連縄を縄代りにして門松を屋根にめぐらすとき、とんど焼きの風情は完全に整うのでした。心柱も小屋の丸太も、必要な藁も、場所となる田んぼも、すべては子供たちに無言で与える天恵の幸だったので。

一時は絶えたかに見えた門松と、とんど焼きも大人たちの主導で復活しつつあるかにみえる昨今です。大人の手出し、口出しのない、子供の中行事としてその成長を見守りたいものです。 [写真 丸山隆士氏提供]

(大町市史編纂室長)

### 博物館だより

- ・資料ご寄贈ありがとうございました敬称略
- 小林喜作の写真 1点 東京都杉並区梅里 藤原藤男
- カルガモ 1点 大町市光明町 平波広美
- タヌキ 1点 北安曇郡美麻村 北沢健次
- ハリオアマツバメ 1点 大町市旭町 青柳 勲
- ゴイサギ他 4点 市内大黒町 笠間政夫
- スギ 1点 大町市社宮本 仁科神明宮
- トアオリ 1点 市内常盤須沼 一志忠雄
- スキーシール他 2点 横浜市瀬谷区瀬谷 長久美智子
- ホンDOIタチ 1点 北安曇郡白馬村 清沢由之

山と博物館 第25巻 第12号

発行所 長野県大町市TEL②〇二二一  
大町山岳博物館

印刷所 長野県大町市後町 大糸タイムス印刷部

定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野一三、二九三)